
甘い香辛料～俺の章～

スコッティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘い香辛料〜俺の章〜

【Nコード】

N0254J

【作者名】

スコッティ

【あらすじ】

甘い香辛料〜僕の章〜と並行していく物語です。

家に帰ったら異世界へ飛ばされましたという話。

超万能型青年、熊谷透が異世界に行って云々という話。

第一話　折角の帰省

京都から横浜へ向かう電車の中、俺は本を読んでいた。

主人公がいて、特別な力を持ったヒロインがいて、二人を取り巻く仲間がいて、ヒロインの力を使って世界を支配せんとする悪の組織がいて、なんていうベタなRPGのような展開の小説だ。

俺は王道な話が大好きだ。無理に開拓した複雑で難解な凝った話はどうも好きになれない。型にはまったものだからこそ安心できるし、純粋に物語を楽しむことができる。

そう思う。

俺は音楽も好きだ。歌い手の洗練された歌声を聞くと、心が落ち着き、なんとなく感傷的な気持ちになる。

ふと、窓の外を見ると田園の風景が広がっていた。人の姿は見えず、ただただ、ぼーっと引き込まれるように眺めていた。

本に琴を挟んでバッグの中に詰め込むと、そのまま睡魔が襲ってきて眠ってしまった。

横浜駅に着くとそのまま別の電車に乗り継ぎ、実家へと向かう。

地元の駅についてからの、家までの徒歩の道のは昔（といってもほんの半年前だが）と変わらず、自然と歩く足が速くなる。

しばらく行くと母校の中学校が見えてきた。なんとなくしにその頃の思い出がよみがえる。友情や勉強、恋に翻弄した思春期時代。その頃の記憶は、あるいは遠い幻想教のようなもののような存在で、

永遠にいる。

ふと、後ろから懐かしい声が聞こえた。奇跡のような確率でそいつと出会った。

「あれ、もしかして透君？透君じゃない？」

かわいらしい、愛でたくなるような声。

振り向くと、そこには昔と変わらない姿があった。

背が低く、19にもなって、なお、幼い顔をした女の子。

「あつ、やっぱりそうだ。久しぶりだね、透君。」

にっと笑う顔がまた母性本能のような保護欲を駆り立てる。

「葛城か？久しぶりじゃん。中学以来？」

葛城――葛城菜々美は俺の小・中学生の頃の友達だ。

こいつとはちよつといういろあつた。要するに、元彼女だった。

そのころの葛城はお調子者で、笑顔の絶えない女の子だったのだが、今は少しばかり、落ち着いた雰囲気醸し出している。やはり、時の流れは人を変えてしまふんだなと、そんな当たり前のようなことを思った。

「そうだね。高校に入ってから音沙汰なかったからねー」

中学を卒業してから、俺のほうから縁を切ったのだ。なぜそんなことをしたのかは覚えていない。覚えていないが、どうせろくでもないことだろう。あの頃の俺の考えていたことなんて。

そのままその場でいろいろな話をした。中学時代の思い出話や高校、大学のことなど、話題は尽きることはなかった。彼女は終始笑顔だった。そんな所は昔から変わらない一つの特徴だ。そんな葛城に、魅せられている自分に気が付いた。もともと、それにどれほどの意味もないのはわかっていた。彼女は妊娠していたのだ。ずいぶんと早い結婚だなどとは思ったが、素直に祝福した。おめでとう、と。すると彼女はやわらかな笑みで返した。ありがとう、と。その表情は本当に幸せそうで、見ているこっちまで幸せになるような、そんな顔をしていた。

「あつ、もう2時間もたってるよ！そろそろ帰んなきゃ」

「そっか。それじゃ、こっちもそろそろ行くかな」

「また、今度はゆっくり会おうよ」

「うん、そうしよう。それじゃね」

そう言っ僕らはその場で別れた。

ようやく家の前について、深呼吸。すーはーすーはー。

「よしっ」

覚悟を決めて、インターフォンを鳴らす。

久しぶりの家族との再会だ。なぜか緊張した。

しばらくすると勢いよくドアが開いて、小学生ぐらいの女の子が出てきた。もちろん、星香だ。

「おかえり！とおにい！」

そういつて飛び掛かってくる星香を両手で受け止める。

「少しでもなくなったんじゃないか、星香。」

「うん！お兄ちゃんが家を出ってから2センチも伸びたんだよ！」

ハイなテンションの星香の背後には両親が立っていた。

ほめながら星香の頭をなでると、嬉しそうな顔をして静かになったので顔を後ろに向け、言った。

「親父、おふくろ、ただいま」

母親がそれにこたえる。

「お帰り、透」

やさしく出迎えてくれたことに安心しつつ、家の中に入る。

家の中もやはり、街と同様に俺が最後に見た時と変わっていなかった。

それだけで妙に安心する。

どうやら、今日は海人を置いて旅行する予定だったが、急遽、俺が来ることになって旅行を取りやめたらしい。海人も損な役回りだと思ったが、それ以上に旅行を中止させてしまったことのほうが気になった。

そうして、両親と妹とともに談笑した。

学校はどうだ、とかみんなはどうしてる、とか、そんな他愛のない話。

だからこそ、それが起こった時はかなり焦った。

日が暮れ始めて、もうすぐ海人が帰ってくるんじゃないかという頃のことだ。

町が光に包まれ、自分が引つ張られるような感覚に襲われる。

いやな予感ばかりが先行したから、とにかく星香だけでも守ろうと妹を抱きしめる。

遠退いてきた意識の中で思った。

どうか海人が無事であるようにと。。。

第二話　山的小屋

どすっ

腹に一撃、もらった際の痛みで目が覚めた。

一体何があつたのかと飛び起きたのだが、その姿を見る前に思い出した。家族と同居していたときには、よくこうやって起きたもんだつた。いや、起こされたもんだつた。

「うう・・・あいから、わず。アグレッツ、シブ・・・」

みると星香が満面の笑みでそこに立っていた。ただし、その笑顔は邪悪色だ。

「早く起きないとおにいがわるいんだぞっ」

なんでそんなに上機嫌なのかとおもつたが、口にはしなかった。そんなことよりも聞くことがあつたからだ。なんとか呼吸を整えてから透は言った。

「ところで、ここは？」

帰ってきた答えは実にあっけらかんとしたものだった。

「分かんない」

取り敢えず俺は体を起こすことにした。すると気付いた、自分がいまベッドの上にいることを。もちろん、実家ではない。さっぱりわけが分からない。

星香が言った。

「山の中を倒れてたところを助けてくれたんだって。」

「誰が」

「きれいなお姉さんといかつい、おに…おじさん？」

その時、扉の開く音が聞こえた。

入って来たのはピンとした背筋をした女性と、筋骨たくましい大男だった。二人とも年の頃では20代半ば程度だと分かったが、なるほど、小学生みたらおじさんだと判断してもおかしくはない。

そこまで考えると同時に、ここが彼らの家だと判断した透は急いでベッドから降りた。

「おお、にいちゃんも起きたか。」

おじさん呼ばわりされた男が言った。

ニツと笑う顔はとても愛想があつた。

とにかく、助けてもらった礼をすることにした。

「あの、どうやら山で行き倒れていたところを助けていただいたよ
うで、どうもありがとうございます。」

「いやあ、いいんだよ。それよりもお前らどっから来たんだ？」

と言ったかと思うと、すぐに首を振り、

「すまん、今のことはわすれてくれ。山の中に倒れてたんなんてき

「つとただ事じゃないんだろうからな。聞いて悪かった」

何やら深読みしたらしいが、おかしい話だが自分でもそこらへんはよくわかっていないので、好都合だった。

「ところであなたたち、どこか行くところはあるの？」

聞いてきたのは女性のほうだった。

「いや、まったく」

そもそもここがどこだかすら分かっていないのに、行くあてなどあるはずもない。

すると女性はよしっといった。何がよしっなのかと思った。

「よしっ、ならうちに泊まってくね」

「おお！そりゃぁいい案だ！」

そうして今夜はここに泊っていくことになった。

第三話　巨大生物たち

その後は惰性で流されるままだった。深い事情は聞かれなかったの
でそこは安心だった。何より星香がはしゃいでいた。二人がかまっ
てくれるからだろう。

そうこうしている間に教えてもらったのだが、男の方がクラシエ、
女の方がアンシというらしい。名前からして日本人でないことは明
らかだった。

振る舞われた料理をおいしくいただき、就寝することになった。

「いい人たちだね、とおにい」

「ほんとだな。でも星香、いつまでもお世話になってるわけにもい
かないぞ」

言った通り、ここの場所がわかりしだい、明日にでも出ていくつも
りだ。

「うん、わかってるよ。お母さんたちも心配だし…」

言われてから気付いた。そうだ、まだ確認はしていない（できない）
が、親や、あるいは海人もあの光を浴びているとするなら、俺たち
と同じようにどこかへ消えているのかもしれない。

そう考えると今にも飛び出したくなる焦燥感に駆られた。

「星香」

言葉を吟味する前に口に出てしまった。仕方ないので更に続けた。

「星香、学校はたのしいか」

何を聞いているんだ自分は。

しかし、ふと横をみるとすでに星香は寝息を立てていたことに、安心した。と同時に抱いていた焦燥感に無意味さを感じた。

人は寝ている間に情報を整理しているという。ならば、明日になれば新しい発想もわくものだろう。

そう期待して透は眠りについた。

翌日、透が目覚めるとすでに隣に星香の姿はなく、綺麗に置まれた布団だけが目についた。こういうところは小学生にしてはよく出来てると思う。さて、その小学生に対抗心を燃やしながら布団を綺麗に畳む限界を追求した後は、やはり、この家の主に顔を出さなければならぬだろう。

どんな顔すればいいのか分からない。笑っておはようございますと言うか、真面目な顔してとめていただいてありがとうございます、というか。

考えていても仕方がないのでとにかく話し声のする扉を開けた。すると、目の前のテーブルにはすでに朝食が四人分用意されていた。勝ち誇った顔を見るに、星香も料理を手伝ったのだろう。透は気おくれを感じた。

とにかく、一同揃っていたから、挨拶をした。アンシが反応した。

「おはよう。ご飯できてるから席に座って」

食事を済ませるとクラシエが言った。

「じゃあ、今日は町の方にも行ってみるか」

「町？」

「ああ、ここは町外れだからね。たまに行かないと生活できないんだよ。」

「あつ、じゃあ俺もついていきます」

借りを作りっぱなしでは何なので荷物持ちぐらいならできると考えた。

「狩りは得意？」

「・・・狩り？」

「そう、魔物狩り」

「・・・魔物？」

「あ、あれ、知らない？」

素直にはいというと、二人に大笑いされた。星香と透はぼかんとしていた。

どうやらここには魔物が住んでいるらしい。一体どういうことかとそとにでたらすべて把握できた。

この家は山のふもとにあるのだが、逆を向けばあたり一面に広がる緑の草原が広がっていた。そしてそこには見たことのないような動物、もとい魔物がはびこっていた。ものすごい勢いで緑を駆けている奴、巨大な羽をば

たつかせている奴、そして、それよりもさらにとてつもなく巨大な体をもつ亀のような生き物など。

星香と透はびびった。それを見たクラシエとアンシは本当に知らないのかと顔を見合わせていた。

「これで連れて行けるかしら」

「無理だろうな」

「じゃあ私が一人で行ってくるから留守番してくれない？」

「あい、わかった。まかせとけ。」

「それじゃ、いつてくるわね」

そういつて、アンシはいつてしまった。

残された三人はその背中を見送り、しばらくしてから家へと引き返した。いまだにあの光景が脳裏を離れない。
だが、そんなことはお構いなしにクラシエは言った。

「一狩り行つとくか」

「……え？」

「武器を持てえい！」

「……はい？」

「これからあいつらをなぎ倒しに行きます」

「……！」

「しよ、正気ですか！？あんなのを倒せって・・・」

「大丈夫だ、俺が守るから」

そういつて大きな声で笑いながらドアを出て行った。
こうして透と星香の修行が始まった。

第三話　巨大生物たち（後書き）

この小説は文章力を上げるためにあるんだ。だから拙くてもいいんだ。

そう考えるようにしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0254j/>

甘い香辛料～俺の章～

2010年10月28日04時24分発行